

# 『贗金つかい』にみる「境界線事例」

—— 複雑系的観点から ——

津 川 廣 行

## 1. はじめに

アンドレ・ジイドのロマン『贗金つかい』が、いわば複雑系の世界を構成するものであることを、筆者はこれまでも述べてきた<sup>1)</sup>。本論文は、作中人物の一人アルマンが述べる「境界線事例」についての論、また実際に作中にみられる「境界線事例」、そしてその事例の周辺をうろつく「悪魔」の分析をつうじて、複雑系の世界としての『贗金つかい』についての考察を深めようというものである。そして、作中に登場する「悪魔」こそは、この複雑系世界の立役者である、と結論することになる。

## 2. 境界線事例

さて、『贗金つかい』の登場人物アルマンは、友人オリヴィエの前で、海難事故を例に、次のように述べる。「六人の遭難者がボートに乗っているところを救助された。二日以来、嵐でさ迷っていたのである。三人は死んでいた。二人は助かった。六人目は意識を失っていた。彼を生き返らせようと思った。彼の体は、限界点に達していたのだった」。もう一時間はやかたらなあと感想を述べたオリヴィエに対して、アルマンはこう続ける。「一時間だって。なんてこった。僕は極限の瞬間のことを計算しているのだよ。まだいける……まだいける。もうだめだ！ それは、尖った尾根で、僕の精神はその上を動き回っているんだ」<sup>2)</sup>

アルマンの話は、哲学者である一ノ瀬正樹がその著書『確率と曖昧性の哲学』の枕として述べている、次の「境界線事例」と同じ性質のもの

であろう。

一酸化炭素中毒になりかかったことがある。高校二年の冬、私はたまたま母親と二人で在宅し、練炭で部屋の暖を取っていた。すると、なにやら、部屋の風景がゆらゆらとしてきて、ぐるぐる回るような感じになった。そのとき、外出していた父親が帰宅し、あわててすべての窓を開け放った。そこまでは覚えている。その後、ぶつっと記憶が飛び、次の瞬間には母と並んで寝床にいて、猛烈な頭痛と吐き気を感じた。それが数分、あるいは数秒続いて、なんとか常態に戻ったのである。おそらく、間一髪だったのだろう<sup>3)</sup>。

一ノ瀬は、このエピソードを「境界線事例」(borderline case)として述べている<sup>4)</sup>。「境界線事例」とは、一ノ瀬自身の説明によれば、ある文の述語が、曖昧であり、《真とも偽とも言えない》ようなケースのことである。たとえば、今の場合、意識があったのか意識を失っていたのかが曖昧な時間があった。一ノ瀬はさらに、「境界線事例」は、「ソライティーズ・パラドックス」を生み出すと述べる。これは、《それぞれの隣接する文に現れる差異をきわめてわずかなものにする》とき《隣同士を区別・識別することができなく》なるという前提のもとに成り立つとされるパラドックスである。著者は、例として、「死」の場合——これはアルマンも関心をもっているケースである——を挙げている。すなわち、死の三徴候〔注：呼吸停止、心拍停止、瞳孔散大・対光反射消失〕が現れた瞬間を時刻  $t$  として、「時刻  $t$  には死んでいない（蘇生可能性がある）」からはじまり、0.001 秒ずつの差をつけて、時刻  $t+0.001s$  には死んでいない、時刻  $t+0.002s$  には死んでいない、時刻  $t+0.003s$  には死んでいない……というような文を続けていくとする。しかし、この連鎖式を続けていくと「三徴候が現れて一年経ったとき、その人は死んでいない（蘇生可能性がある）」というような「明らかに事実に反した主張」が生ずることにもなる。これが「ソライティーズ・パラドックス」と呼ばれるも

のである。あるいは、これは、砂山の砂を一粒ぐらい除去してもやはりそれが砂山であることには変わりがないが最後の一粒になっても果してそれは砂山であるかという観点から、「砂山のパラドックス」ともいわれる。このパラドックスは、「単なる詭弁であって実際には発生しないものであると一見思われがちだが、倫理的な場面では、「ソライティーズ」が実際に発生してしまう」という。つまり、いつから人間（胎児）が「人格」になるかは曖昧で、「中絶が殺人になるかどうか」という問題は「ソライティーズ」に巻き込まれざるをえない」と一ノ瀬は主張する。

もっとも、以上の「境界線事例」において、 $t+0.001s$ 、 $t+0.002s$  と刻んでいく意味は、アルマンの場合と一ノ瀬が考えるのとでは違っている。一ノ瀬は、わずか 0.001 秒ならば、状態——例えば意識があるかないか——に変化はなく、したがって結果——死ぬか蘇生するか——への影響もないはずだと仮定する。この操作を延々と続けるならば、一時間、いや一年経っても状況は変わらないことになる。これが、「明らかに事実と反した主張」であることは一ノ瀬も認めているのだが、その関心は、むしろ、どっちつかずの曖昧な領域があることに向けられる。こうして、一ノ瀬は、《それぞれの隣接する文に現れる差異をきわめてわずかなものにする》とき《隣同士を区別・識別することができなく》なるという仮定のもとに、変化していく事態の連続性の性格を強調する。

これに対し、アルマンは、どちらに転ぶかの限界点、「尖った尾根」があるはずだと思う。けだし、分水嶺に落ちた水は、わずか 0.001mm の幅の差で、あるものは東の海へ、別のものは西の海へと向かうであろう。「存在と非存在のあいだのこの境界線、これをいたるところに引こうとやっきになっている」<sup>5)</sup>とアルマンはいう。彼の場合は、一ノ瀬とは反対に、少しずつ変化していく事態の非連続性を強調する。その境界線、あるいは境界面では、少しの違いが結果に大きな差を生み出すというあの初期値鋭敏依存性の力学が働いている、といってもよい。

アルマンは、「境界線事例」として、四つの例を挙げている<sup>6)</sup>。一つ目は、感電死の話である。ある作業員が、送電線にふれて死んだ。電圧は

さほどではなかったが、体が汗で濡れていたために電気が通ったのである。もし、彼の体が湿っていなかったら、死ななかったであろう。では、乾いている体に一滴ずつ汗を加えていってみよう。まだ大丈夫。もう一滴くわえても大丈夫。だが、それを越えると死んでしまう限界としての一滴があるはずである。

二つ目が、今の海難事故の話であるので、繰り返すことはしない。

三つ目は、いわゆるパスカルの「鼻」である。アルマンは、オリヴィエの前で弁じ続ける。

パスカルは言った、《世界の表面は変わったであろう》と。だが、《もしクレオパトラの鼻がもっと短かったら》と考えるだけでは十分でないだよ。僕はこだわるね。聞きたいもんだ。もっと短くといったって、どれだけ？ だって、鼻は、あとほんのちょっとなら短くたってよかったんじゃないかね？ グラデーション、グラデーション、それから突然の飛躍<sup>7)</sup>。

最後に、アルマンは、自らを、砂漠のアラビア人にたとえる。もう一滴の水、だが、その一滴がないために助からない旅人に。

なるほど、アルマンは、作者ジイドと同様、「境界線事例」という学術用語を知るべくもなかった。だが、彼は同様のことを、ラテン語の格言《自然は飛躍せず》が正しいかどうかという問題として考察する。ジイドは、上の三つ目の例と四つ目の例の間で、アルマンに、この格言に対して、「冗談じゃない」と反発させている。つまり、この世界に、「飛躍」はあるのかどうか、アルマンおよび作者ジイドの関心だったといえるだろう。

この《自然は飛躍せず》は、古い諺とも、リンネもしくはライプニッツの言葉ともいわれる。自然が示す連続的な多様性こそは、リンネの分類学の根底にあるものである。自然の多様性と、それを貫く秩序、これをライプニッツは、モナドによって表現しようとしたといえる。ところ

が、世紀の変わり目に、『自然は飛躍せず』の自然観がゆらぎはじめる。量子的な飛躍が示されたのは、一九〇〇年、プランク定数によってである。だが、物理学にはさほどの興味を示さなかったジイドは多分そのことを知らなかっただろう。

彼の造詣が深かった生物学の領域で言えば、『飛躍せず』の自然観に疑問が突きつけられたのは、ド・フリースによる一九〇一年の「突然変異説」によってである。なお、ジイドは、一九一〇年六月十九日の『日記』で<sup>8)</sup>、書名をあげないままに、この遺伝学者の著書を読んだとしている。プレイヤード版の編者は、彼が読んだのは、当時、オランダ語からフランス語に翻訳されていたその唯一の著書 *Espèces et variétés, leur naissance par mutation* (邦訳『生物突變説』) であったと推測する<sup>9)</sup>。

もっとも、ジイドはこの格言に、二十代の半ば、『種の起源』を熱狂しながら読んだとき、すでに出会っていたはずである<sup>10)</sup>。ダーウィンは『種の起源』で『自然は飛躍せず』を「古い諺」として何度か引用している<sup>11)</sup>。遺伝子が突然変異するメカニズムが知られていなかった時代にあつて、この天才は、微小な変化が積み重なって大きな変化となることにより、新しい種が誕生するのだと考えた。このことを思えば、『自然は飛躍せず』は『種の起源』の基本的姿勢を示すキーワードであるといっても過言ではない。感激しながら『種の起源』を読み、そのあと、これを否定しようと意気込むド・フリースの著書に触れたことで、ジイドのなかで、連続か断絶かという、進化論にたいする更なる興味と疑問が生じたといつてよい。

飛躍ばかりからなる生物は存続しえないことから明らかなように、『自然は飛躍せず』の否定は、生物学のレベルでは、全否定ではなく部分否定を意味する。「『自然は飛躍せず』か。冗談じゃない」と、ジイドがアルマンに言わせたその意味は、すべてが飛躍するというのではなく、飛躍しないものもあるということである。ここで考えなくてはならないのは、基本的には『自然は飛躍せず』の一ノ瀬的な連続性があり時としてそれを断ち切る飛躍がある空間、つまり、連続に不連続が混じり込ん

でいる空間であり、アルマンからすれば、一見したところ平穏無事にみえる日常生活の至るところに「境界線事例」が待ち伏せている世界である。これは、作中人物達にとって落とし穴である点で、『贋金つかい』のあの偶然と必然とが縋い交ぜになった世界——登場人物のあずかり知らないごく小さい原因も最終的に大きな結果を生み出すというところから筆者が複雑系的世界と呼んできたものの一端を構成するものである。アルマンが挙げた「境界線事例」は、複雑系の現象の一例であり、その境界線上では、初期値鋭敏依存性が働いているといえる。

このような『贋金』世界において、作中人物達は、時折、クリティカルポイント（臨界点＝危機的な点）に遭遇し、この引き返すことも突き進むこともできるぎりぎりの線上で、いわば魔が差したように、我にもあらず突き進んでしまう。いや、奇妙なことに、『贋金』では、以下で述べ、論ずるような「悪魔」が、彼らを後押しするかのように、好きこのんでこの境界線上に姿をあらわす。

### 3. 悪魔

ジイドは『贋金』の制作に際し《主題を客観化する》(objectiver le sujet)<sup>12)</sup> ように努めたとしている。その客観世界に悪魔が登場してよいものであろうか。これは、筆者にとって、長年の疑問であった。なるほど、『贋金』の「客観性」は、一風変わっており、作者自身によれば、「人物達を外部からとらえることに存する客観性」<sup>13)</sup> なのではなく、作者からさえも自立している作中人物達が、勝手に行動し、話し、書く、そういった主体性が交錯しあうところに、生じてくるものである。こういった、独特のニュアンスがあるにしても、悪魔は、どのようにしてこの「客観的」な作品世界のうちに入りうるのだろうか。

実際、悪魔は出没自在であり、たとえば、冒頭部から、暑い中、バカロレアの勉強をしているベルナールの意識のなかに入り込む。「試験まであと三週間しかなかった。家族は彼を一人っきりにしてくれた。だが、悪魔はそうはいかなかった」<sup>14)</sup>。かくして、その注意力が減退し試験勉

強を中断したベルナールは、母の不倫の手紙を発見し、家出を決心することになる。例えばまた、誤診によって余命幾ばくもないと宣告されたヴァンサンは、どうせ死ぬならと、サナトリウムで陥った恋の結果として妊娠させてしまったローラ（彼女もまた誤診の結果やがて命果てるものと思っていた）を、なんとか援助しなくてはならない立場にあり、今、母がやっとの思いで蓄えてきた5千フランを手に入れている。それは、そっくりそのままローラに渡さなければならないお金である。ちょうどそのとき、パッサヴァンが、彼に賭場へゆく誘いをかける。5千フランでは足りないよ、という思いがその脳裏をよぎる。「いかなる悪魔の忠告に耳を貸してしまったのだろうか」<sup>15)</sup>、彼は、パッサヴァンに付いていき、結局、全部をすってしまふ。

悪魔は、『贗金』の登場人物達をからかい、こうして彼等を船出させる。家出したベルナールは一回り大きくなって義父の家へと戻ってくることになるのだが、他方、ヴァンサンとレディー・グリフィスのカップルは、悪魔に導かれるようにしてアフリカの奥地へと向かい、読者の視界から消えてゆく。レディー・グリフィスがパッサヴァンに書いた最後の手紙には次のようにある。「私が彼を引っ張り回しているのだから、彼が私をそうしているのだからもうよくわからない。あるいは、むしろ、わたしたち二人をこんなふうに攻めたてるのは冒険の悪魔ではないのかしら」<sup>16)</sup>。悪魔は、作中人物の外にもいて、そのアヴァンチュールがうまくいくようにと、小道具を用意する。たとえば、ベルナールは、たまたま手に入れたエドワールの荷物の預り証で、そのスーツケースを引き出そうとしたとき、係員から、10サンチームの料金を要求されるのだが、悪魔の介在で、チョッキのポケットから、しばらく忘れていた、10スー硬貨をとりだすことができた、とされる<sup>17)</sup>。悪魔が用意したこの硬貨がなかったならば、『贗金』の世界は一変していたことであろう。

悪魔は、我々のあずかり知らないところで我々の決断に関与しているものとして、あるいはその決断の場に立ち会うものとして描かれる。ベルナールはなぜ、家族が気を遣って一人っきりにしておいた受験勉強の

時間に、机を離れ、気晴らしをし、母の不倫の手紙を発見してしまったのか。暑さが注意力を減退させることをわれわれは知っているのだが、ただ、いったい気温が何度にも達したら糸が切れるのかは知らない。水分の欠乏のために死ぬことは知っているのだが、いったいどの一滴が命を救うのかを知らない。しかし、微妙な「境界線事例」にかぎって姿をあらわすこの悪魔は、その間の事情を、そして姿をあらわすべきその瞬間を心得ていると言わざるをえない。こういったケースに限って悪魔は登場し、作者はその介在をほのめかす。なぜ、ヴァンサンは、危険な賭をしてしまったのか。彼を賭場に向かわせたもの、これを無意識と呼びなければそう呼んでもよいが、作者はこれをことさらに「悪魔の忠告」と呼ぶ。もちろんこの「悪魔」もまた誘惑する者ではあるが、それは、餌食を人倫に反する悪の道へと差し向ける、あの強力な蹴爪をもった従来型の悪魔とは違う。『贗金』の「悪魔」は、悪の権化というより、「境界線事例」にしか姿をあらわさない転轍機のようなものである。彼には、作中人物の関心の方向をちょっとだけかえてやる気まぐれ、あるいは作中人物が脱線するのを眺めてはほくそえむ遊び心がある。一言で言えば、彼は、作者がレディー・グリフィスに言わせたように「冒険の悪魔」である。

ところで今まで一律に「悪魔」という日本語で呼んできたものに対応するフランス語としては、『贗金』では、多くの場合 «démon» が、時として «diable» が使われている。一口に「悪魔」といっても、様々な呼称があり、ジイドの作品全体をとおしていえば、diable, Satan, le Malin そして démon が用いられており、Lucifer は稀である。アラン・グーレは、ジイドが、これらの語にそれぞれ特別な意味を与えたとは思われなくとする<sup>18)</sup>。たしかに、ジイドは、同一の語の連続使用を避ける、あの文章作法から、同じ文のなかで、démon を diable と言い換えてみたり、diable を Satan といってみたりしている。たとえば、『贗金つかいの日記』に付録として添えられている「悪魔の身元」(identification du démon)<sup>19)</sup> という一文では、「悪魔」は標題では «démon» の名で呼ばれているが、文



中ではそれが «diable» や «Satan» に置き換えられている。また、前日の夜にこの文をものしたと記した一九二一年一月二日の『贗金つかいの日記』では、ジイドはこれを「ディアーブル非在についての論」(*Le traité de la non-existence du diable*) の名で呼んでいる<sup>20)</sup>。

呼称に揺れはあるものの、悪魔について『贗金』の作者が自ら論じたその文の骨子は、「これに気づかないでいる時ほどこれに最もよく仕えている時はない」<sup>21)</sup> というものである。悪魔は、これを信じないときほどよくのさばるという主張を、ジイドは、その語り手をつうじて、『贗金』そのもののなかでも行っている<sup>22)</sup>。ジイドが、悪魔のこのような、逆説的な存在様態について考えはじめるのは、ジャック・ラヴラとの、一九一四年九月の会話の結果として、一九一六年ごろからであると思われる<sup>23)</sup>。

われわれの悪魔は、蹴爪をはやし恐ろしい形相で人々を誘惑する従来型の悪魔と違って、気づかれぬようにそと姿をあらわす。なぜなら、その方が効果的だからである。作中人物達に気づかれぬのに、いや気づかれぬからこそ、悪魔は、その運命を弄ぶことができる。ただし、レディー・グリフィスの場合のように、最終的にその存在が勘ぐられることもありうるのだが。特にこの『贗金』型の悪魔を、「ディアーブル」と区別して「デモン」と呼んでもよいのかもしれない。実際『贗金』では、語り手の紹介によって読者にだけ姿を見せるその悪魔は多く「デモン」の名で登場する。ただし、以上で述べたように、「ディアーブル」と呼び換えられている場合も少なくない。以下、「悪魔」と呼ぶのは、特に指示しない限り、「デモン」と呼んでもいいようなこの『贗金』型の悪魔を意味することを断っておきたい。

#### 4. 自然——ナチュラリスト

一酸化炭素中毒や蘇生可能性の例からすれば、境界線事例は、我々の意識や肉体にかかわる問題であると同時に、砂山のパラドックスの例からすれば、それは我々の意識の対象としての事物にかかわる問題でもあ

る。『贗金』の悪魔の場合でいえば、彼は、作中人物達の外にあって彼等を眺めることもできるし、そのなかに入りこんで囁くこともできる。アルマンに言わせれば、それは全自然にかかわる問題である。彼は「僕はここで、全自然をつうじて、限界点、その手前にあっては何ごともし起らない限界点を探りたかったのだ」と言う<sup>24)</sup>。

アルマンは、「不足論」という一文を書くために、上に挙げたような例——境界線事例の発想を得たのだという。多くの現象は、連続的に変化しうるものだとしても、また、インプットは連続的でも、アウトプットは0か1、という現象も稀ではない。そして、アルマンは、例えていえば、1の状態に達することなくつねに0の不足状態に停留していることを嘆いている人物である。執筆計画中の文の「不足論」という題名には、彼のコンプレックスが見え隠れしている。「金もなく、力もなく、才気もなく、恋もない。ないない尽くしさ。僕はいつまでたっても、抜けきれないのさ」<sup>25)</sup>。だが、こう嘆くアルマンとは反対に、ベルナールやヴェンサンのような人物は、自ら望んだ覚えがないのに、1をインプットしてしまう、あるいは押されてしまう。彼らが楽々と一線を乗り越えてしまうのに対して、いつだってその手前に留まっているという不満が、アルマンに、境界線事例のメカニズムを誰よりもよく見させている。

以上のことから、アルマンのいう《全自然》には、博物学が対象とするような地上の諸現象だけでなく、人間の意識を、さらには社会的制度をも含めて考えなくてはならないことがわかる。彼に不足しているのは「金」や「力」や「才気」や「恋」という社会的因子だからであり、そして、人間社会の到る所にみられる「ある」と「ない」のあいだの不連続は、閾値が制度として設けられていることによって生じるものだからである。アルマンが感じている不平等の起源は、連続な状態と、不連続な制度が混在していることにある。

ジイドは、人間社会のこのようなパラドックスを、自然のなかにも見出すことによってこれを再びその中に位置づけたのであろうか。いや、彼は、むしろ反対に、自然観察に導かれたモラル上の発想や生物学をは

じめとする自然科学関係の読書が気づかせてくれた教訓などを、人間観察においても有効であると思うようになった、と言わなくてはならないだろう。作者は、ベルナルの異父兄弟であるヴァンサンをして、作中の作家パッサヴァンにむかって、こう豪語させる。「あなたは、おそらく、人間は、動物とまったく違うと思っているのでしょうね。畜産学の大発見にして、人間を知ることに於いて影響を及ぼさなかったことは何もないんですよ」<sup>26)</sup>

かつて、『地の糧』のジイドにとって大自然は、充実した連続の世界であり、そのことによってまた、多様な世界であった。若いジイドは、事物の多様性とその完全な調和を夢見る。「すべてを包み込む物理法則。列車が闇を突進する。朝にはそれは露にぬれている」<sup>27)</sup>。ルソー以来、多くの作家達にとって、幸福であるためには、人工物を包み込む、豊かで優しい自然のことを思うだけで十分であった。だが、『贗金』で描かれた社会は、二十世紀の遺伝学者や物理学者にとっての《自然》と同様その制度化によって不連続のメカニズムを含むことになった。このようにして、人間世界に疲れたアルマンは、「《自然は飛躍せず》か。冗談じゃない」と啖呵を切ることになる。

記号は、ソシユールをまつまでもなく、分節化作用によって断絶をもたらし。ジイド的世界にあっては、人を誤らせるにいたる確信を与えるものは、観念という記号であるが、その観念もまた、一つの記号として、分節化されている。連続的な未分節の世界を、素朴な観念でもって扱うことは無謀であるはずなのだが、また、いずれにしてもそうするしかないということを考えれば、アラン・グーレの言い方をもってすれば、すべて人は、「贗金つかい」の予備軍であるといえる<sup>28)</sup>。そうであるならば、このロマンに見なくてはならないのは、贗金を弄ぶ者達の不誠実さ以上に、我々はみな否応なく贗金つかいになってしまうという、世界の仕組みのほうにあるということになる。

ジイドが『贗金』で見せてくれたこの罫としての仕組みは、言語をはじめとする人間的制度とこれには還元できない自然という、単純な二元

論的図式を越えている。ここには、自然そのものが、時によって、素朴な自然観には還元できない不連続性を示す、という、二十世紀的な視点が加わっているからである。以下、この点について、述べよう。

ジイドが、『贗金つかい』を書くかたわらこれと並行させて『贗金つかいの日記』を書いたことは有名である。ところが、ジイドのプレイヤー版新版には、さらに、〈『贗金つかいの日記』の余白に〉という頁が設けられている。これは、『贗金つかいの日記』のマニュスクリのうち、ジイドが採用しなかったものを集めたものである。その、一九二一年十二月七日の分として、次のような記述がみられる。「博物学には、活用する価値が大いにあるようだ。このロマンに、ナチュラリストを介入させる必要あり。[…] たとえば、ウリアランとステノアランへの分類」<sup>29)</sup>。ここで、慣例にしたがい、「博物学」と訳したのは、「histoire naturelle」の語であるが、ジイドの時代には博物学も分化と専門化が進んでおり、これは、むしろ自然研究学だとか自然学と訳すべきものであり、自然科学と同等のものであるといえるだろう。同様の理由から、「naturaliste」の訳は、「博物学者」ではなく、あえて単に「ナチュラリスト」のままにしておいた。

実際、ジイドは、そのようなナチュラリストを『贗金』に導入する。それが、ヴァンサンである。ヴァンサンは、学部を出たばかりの医者のお卵であるが、むしろ「自然科学」(sciences naturelles) に引かれている<sup>30)</sup>。この「ウリアランとステノアランへの分類」の話について、ジイドは、ヴァンサンをして、新たな恋人リリアンの前で語らせる。「ウリアラン」(euryhalin) の語は、広塩性の、つまり、さまざまな塩分濃度の水に生息することのできる、という意味の形容詞であり、ここでは、そのような生物という名詞の意味で使われている。他方、「ステノアラン」(sténohalin) は、狭塩性の、すなわち、外界の塩分濃度の変化に耐える能力が小さく、ほぼ一定の濃度の下でしか生存できない生物についていう形容詞・名詞である。ステノアランは、淡水が流れ込んでくるような海域では、弱り、死んでしまう。これにたいして、塩分濃度の変化に耐えられるウリアラ

ンは、平気であり、弱ったステノアランを餌食にするのだという<sup>31)</sup>。ジイド自身、彼のグループの人たちを、あいつはステノアランだ、こいつはウリアランだと分類して面白がったと、プティット・ダーム、すなわちジイドの娘の母方の祖母は記録している<sup>32)</sup>。

ここにも、境界線事例の問題を見ることができる。塩分濃度は、連続的に変化しうる。ところがその連続性のなかに、ステノアランから見れば、生死を分ける境界線が、すなわち、魚の種類や個体によって濃度のレベルや感度は違うかもしれないが、そこを越えると死にその手前だと生きていられるというボーダーラインがある。反対に、ウリアランにとって、ステノアランにとっての境界線はボーダーラインではなく、その仕事とはいえば、ステノアランにとってのボーダーラインの付近で、彼等が弱ったり、一線を越えたりするのを悠々と観察したり、これを餌食としたりすることである。このウリアランは、『贗金』にしばしば登場する悪魔に——作中人物たちが境界線上で苦しんでいるときにこれをほくそえんで眺める悪魔に——たとえることができる。たとえば、新たな恋人リリアンの部屋へつうずる鍵を手にしたヴァンサンを面白そうにながめていた悪魔のように<sup>33)</sup>。

ヴァンサンは、自然科学に興味をもつ者の常として、超自然的なものを信じない。だが、超自然的な神も（従来型の）悪魔も信じないこの医学部卒業生こそは、悪魔にとって格好の餌食であった。この『贗金』のころのジイドには、「これに気づかないでいる時ほどこれに最もよく仕えている時はない」という独特の悪魔観がみられることはすでに述べたとおりである。

ここで、彼らは、結局、悪魔の誘惑に負けているだけだ、という反論があるかもしれない。なるほど、『贗金』の悪魔に、人間を誘惑するというあの古典的な悪魔の性格が、まったくないということはできない。だが、餌食をただ眺めて楽しんでいるだけの悪魔の態度などは、従来型の悪魔による誘惑ということだけでは説明ができない。もう一つ例を挙げよう。ジョージ・ストラウスは、悪魔とジイドというテーマで、その全

生涯にわたっての考察を行ったが、この評者が描き出した「悪魔」は、作家が若い頃にであった誘惑についての検討をも含むだけに、従来型の性格を帯びざるをえなかった。だがこの古典的な見解をもってしては、ストラウスは、スーツケース引き出しの手数料として10サンチームを要求されたとき、なぜ悪魔が現われてベルナールの手に10スー硬貨を握らせたのかを言うことができなかった。この場面での、悪魔の突然の登場に戸惑った彼は、これは「言葉のあや」(une façon de parler)ではないかとした<sup>34)</sup>。だが、我々は、最後に別の結論を下すことになるであろう。

## 5. 語り手

悪魔以外にも、この『贗金つかい』には、作中では行動しない、何だか分からぬ語り手が登場する。しかし、その語り手もつねに全知であるわけではない<sup>35)</sup>。では、『贗金』のあちこちに登場する悪魔こそは、全知なのであろうか。少なくとも、得体の知れない存在として導入されている以上、悪魔は、登場人物達よりも、そして語り手よりも炯眼である。では、悪魔は、作者以上に、事情に通じているのであろうか。あるべき作家のスタンスは、作中人物達が行動するのを見、語るのに耳を傾けるだけだという、既述の、作者自身の主張が実現されているとすれば、然りである。では、悪魔は、全知の、神のような存在なのであろうか。否、である。神は、もし存在するとすれば、常に存在しているはずであるが、節目々々に姿をあらわす悪魔は、見え隠れするにすぎない。ベルナールが、暑さにうだって、注意力散漫になったその瞬間、——勉強をつづけるのか気晴らしをするのかといったその瞬間、悪魔は現われる。ヴァンサンの場合も、お金をどうするかといった瀬戸際に、一ノ瀬風にいえば、「境界線事例」のケースにおいて、悪魔は姿を現す。もっとも、複雑系原理の働く境界線を嗅ぎだしうるからといって、『贗金』の悪魔が行く末を見通していないことは、語り手や登場人物達や読者達と同様である。

複雑系の世界であるこの世界にあっては、未来は現在の状態によって完全には説明されえない。というのも、複雑系の世界にあっては、目に

つかない無数のごくささいな出来事のうちの一つがとんでもない大事件を引き起こしうるからである。とはいえこれは、時をへて現在となった未来が、過去となった現在を説明しえないということではない。起こってしまってからなら、厳密な調査をするならば、また条件が十分にそろえば、そのメカニズムは解明されるであろう。ここで言いたいのは、事後になら、そのメカニズムを理路整然と指摘できる事柄についても、事前にはそれを言うことができない、というような出来事がある、ということである。これはまさしく、複雑系的思想家であるベルクソンがその『創造的進化』で主張したことである<sup>36)</sup>。つまり、どの「一滴」が引き金になるのか言えないような事件・事故・自然現象が、我々の不意を突く。それにもかかわらず、我々は、やはり、重大事件の最初の徴候を、前もって知りたいと思う。作者も、語り手も、登場人物達も、我々自身も、誰しもが予知したいと思いながらもそうすることができない事柄の前に姿をあらわす知性が、『贗金』では「悪魔」として指定されている。この知的な悪魔を、われわれは、すでにのべたように、倫理的な従来型の「悪魔」と区別して、「デモン」と呼ぶこともできるであろう。

決定論について論ずるとき、引き合いに出されるのが、「ラプラスの魔」、あるいはラプラスのデモンである。ラプラスは、初期条件（簡単に言えばある時点での「たとえば現時点での」状態についてのあらゆるデータ）を正確に知っているならば、解析によって、未来永劫にわたって、世界の状態を予見できる、恐るべき知性を仮定した。これが、ラプラスの魔と呼ばれるものである<sup>37)</sup>。もし、このデモンが、存在するとしたら、サイコロの目の出方までも予見できるはずである。ところが、非決定論的世界である複雑系の世界を構成している、誰一人として全知ではない『贗金』においては、ラプラスの魔は、棲息しえない。『贗金』の悪魔は我々以上に裏世界に通じているにしても、彼もまた全知ではない。悪魔は、細かなこと、ふとしたことに顔をだすだけである。それでいて、世界を大きくかえてしまう。けだし、悪魔は細部に宿る、といってよい。



## 6. おわりに

古典的物理学の世界には、ラプラスの魔は棲息しえたが、複雑系的な物理世界では、それは存在しえない。複雑系の科学者達、たとえばイーヴァル・エクランドやダンカン・ワッツが思い浮かべるような複雑系の歴史世界にもまたこの恐るべき知性の魔の居所はありえない<sup>38)</sup>。心理的・生理的・感覚的な事柄についてもラプラスの魔が介在しえないことについては、それが、「境界線事例」として生じていると考えれば、これまで述べてきた一ノ瀬の曖昧さについての解釈で十分であろう。あるいは、次のようにいってもいいであろう。どの程度の刺激によって生物にスイッチが入るかという閾値には、金子邦彦によれば、明確化できない「ゆらぎ」があるのだが<sup>39)</sup>、この「ゆらぎ」を前にして、ラプラスの魔はたじろぐ、と。

ゲーレは、『贗金』の人物達のほとんどに、悪魔がとりついているとすら。「悪魔が、どれほど個人の主観性の真ん中に入り込んでいるのかわかる」<sup>40)</sup>というわけである。しかし、「個人の主観性の真ん中に」、でよいのであろうか。少なくともそれは、その真ん中に、ではなく、その端っこに、であろう。たしかに、ゲーレは、続けて、その悪魔は、ラカンのいう大文字の他者、象徴界、無意識であるといいかえている<sup>41)</sup>。もしそういいたいのなら、悪魔とは、無意識、つまり他者の言語であるといってもいいかもしれない。そして、たしかに、ジイド自身、ラ・ペルーズ老人にこういわせている。

この世では、神はいつだって沈黙しているってことに、気がついたことはありますか。しゃべっているのは、悪魔ばかりだよ。[…] 福音書の冒頭を覚えていらっしゃるかな。《はじめに言葉ありき》[注：ヨハネによる福音書]。こう考えたりしたものだ、神の言葉、それは、森羅万象だってね。だが、悪魔がそれを、奪い取りやがった。今じゃ、悪魔の音が、神の声をかき消しておる<sup>42)</sup>。



たしかに、悪魔の言葉とは、他者の言語であるといつてよいであろう。ただし、その他者の言語が、サイコロを振るようにして、ランダムにあたえられるときに、である。たとえていえば、頭の中でルーレットがぐるぐる回っているような状態のときに、である。『贗金』には、転轍機とでもいうべき出来事の装置が、いたるところにちりばめられている。そして、悪魔は、作中人物達への出入りが自由である以上、その転轍機を彼らの頭の中に持ち込むこともできるはずである。『贗金』の人物達は、どう出るか分らないような、サイコロ的現象、あるいは確率事象のような思考によって振り回される。この混乱を引き起こしているのが悪魔である。我々が、理解できないことにあたえる、人間的な呼称、これが「偶然」であるとするならば、『贗金』の登場人物達のなかでも、そのような「偶然」が起こっている、とみることができる。勉強をやめ、とんでもない手紙を発見してしまったベルナールも、賭をしてしまったヴァンサンも、また加えて語り手も、なぜそうしてしまったのかを説明できないのだが、この説明しがたいものが悪魔の取り分である。これに、『無意識』の名をあたえることは、容易であろうが、だからといって、これによって理解がさらに深まることはない。少なくとも、それは、最初は分らなかったが、物語が進行するにつれて明らかになってくる、あのジイド文学的な無意識とは違うものである<sup>43)</sup>。

悪魔も、説明しがたいもの理解しがたいものすべてを解決し調整してくれる、というわけではない。反対に、ジイドは、「とんでもない総計を得るには、往々にして、一つ一つとってみればごく普通の、ごく自然な多くの小さな事実を加え合わせるだけで十分だ」とヴァンサンに考えさせている<sup>44)</sup>。『贗金』の世界は、文字どおり、伏魔殿であり、ごく自然な多くの小さな事実の組み合わせからどんな結果がでてくるか予測もつかない複雑系的世界である。垂直に立てた棒のように、どちらに転ぶか誰にも、本人にも、わからない境界線事例は、その伏魔殿の土台の石の一つを、柱の一本をなすものであるといえるだろう。

ラ・ペルーズのいうように、『贗金』では、超自然的な「神」はもう言

葉を発しない。超自然的な「神」と対をなすべき従来型の悪魔は、そのライバルを失うことによって、我々のあの「冒険の悪魔」へと席を譲ってしまった。この新しい悪魔が、作者の目に、技法として標榜する「客観性」を汚さないとみえたのは、それが超自然性を失ってしまっていたからである。ストラウスが、ベルナールに硬貨を握らせた悪魔の仕業に戸惑いながら、それは「言葉のあや」だとしてしまったのは、我々の悪魔のこのような非超自然的性格に気づかなかったからにほかならない。もはや超自然的でない『贗金』の悪魔とは、「神」の対抗者ではなく、神なき複雑系的世界のメカニズムを人格化したものであるといえる。垣間見た複雑系的世界を描きだすのに際して、科学の用語を知らないジイドは、これを「悪魔」という人格によって語ったのであった。

(大阪市立大学教授)

#### 注

André Gide の作品については、次の版を用い、これを、左側に示したような略号で表記する。

- RRI — André Gide, *Romans et récits* — *Œuvres lyriques et dramatiques I*, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 2009.  
 RRII — André Gide, *Romans et récits* — *Œuvres lyriques et dramatiques II*, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 2009.  
 JI — André Gide, *Journal* — 1887-1925, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 1996.  
 JII — André Gide, *Journal* — 1926-1950, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 1997.

- 1) 津川廣行「ジイドの『贗金つかい』と《複雑系》の問題——コスモスとカオスの狭間に」、『仏語仏文学』35、関西大学フランス語フランス文学会、2009年3月、pp. 91-111.
- 2) Six naufragés sont recueillis dans une barque. Depuis dix jours la tempête les égare. Trois sont morts; on en a sauvé deux. Un sixième était défaillant. On espérait encore le ramener à la vie. Son organisme avait atteint le point limite. [...] Une heure, comme

tu y vas! Je suppute l'instant extrême; on peut encore... On peut encore. On ne peut plus! C'est une arête étroite, sur laquelle mon esprit se promène. (André Gide, *Les Faux-monnayeurs*, RRII, p. 387)

なお、この作品からの引用については、以下、さらに簡略に *FM* で示す。

- 3) 一ノ瀬正樹『確率と曖昧性の哲学』、岩波書店、2011, p. 1.
  - 4) 以下、一ノ瀬からの引用はすべて、前掲書、pp. 20-23.
  - 5) Cette ligne de démarcation entre l'être et le non-être, je m'applique à la tracer partout. (*FM*, p. 387)
  - 6) *Ibid.*, p. 233.
  - 7) “La face du monde eût changé”, dit Pascal. Mais il ne me suffit pas de penser: “Si le nez de Cléopâtre eût été plus court”. J'insiste. Je demande: plus court... de combien? Car enfin, il aurait pu raccourcir un tout petit peu, n'est-ce pas?... Gradation; gradation; puis, saut brusque... (*FM*, p. 388)
- なお、ジイドは、アルマンに、パスカルからの誤った引用をさせている。正しくは、Le nez de Cléopâtre: s'il eût été plus court, toute la face de la terre aurait changé.
- 8) *Jl*, p. 641.
  - 9) *Jl*, p. 1557.
  - 10) ジイドが『種の起源』を読んだ過程については、津川廣行「《来るべき神》の思想——ジイドへの進化論の影響について——」、『仏語仏文学』38、関西大学フランス語フランス文学会、pp. 93-115 を参照のこと。
  - 11) 例えば、チャールズ・ダーウィン『種の起源』(上) 渡辺政隆訳、光文社文庫、2009、p. 327; p. 328; p. 345 ; p. 354.
  - 12) *Journal des Faux-monnayeurs*, RRII, p. 528.
  - 13) «l'objectivité qui consiste à prendre les personnages par l'extérieur» への批判。(André Gide, «Feuillets», *Œuvres complètes*, XIII, N.R.F., p.439)
  - 14) (...) [Bernard] n'avait plus devant lui que trois semaines. La famille respectait sa solitude; le démon pas. (*FM*, p. 175)
  - 15) De quel démon alors avait-il écouté le conseil? (*FM*, p. 201)
  - 16) Je ne sais plus trop si je l'emmène ou s'il m'emmène; ou si, plutôt, ce n'est pas le démon de l'aventure qui nous harcèle ainsi tous les deux. (*FM*, pp. 415-416)
- なお、プレイヤード版のこの箇所では、「où」とあるのは誤植。
- 17) Il n'avait plus un sou. Que faire? La valise était là, sur le butoir. Le moindre manque d'assurance allait donner l'éveil; et aussi le manque d'argent. Mais le démon ne permettra pas qu'il se perde; il glisse sous les doigts anxieux de Bernard, qui vont

fouillant de poche en poche, dans un simulacre de recherche désespérée, une petite pièce de dix sous oubliée depuis on ne sait quand, là, dans le gousset de son gilet. (*Ibid.*, p. 233)

- 18) Selon la tradition biblique, il [= démon] est alors l'Autre, l'Adversaire, le Malin, le Diable, Satan. Dans ses écrits, Gide alterne l'emploi de ces différents termes sans qu'il soit possible la plupart du temps de leur attribuer une valeur spécifique. (Alain Goulet, *Fiction et vie sociale dans l'œuvre d'André Gide*, Association des amis d'André Gide, 1986, p. 534)

一般に、キリスト教的コンテキストにおいて、「デモン」は、サタンやディアーブルの同義語としても用いられるが、違いがあるとすれば、ギリシア起源のその異教性にある。「デーモンは偶像の中に住んで、異教徒が供える食物を食べている、とユスティノスは言う。異教の神々とはたんなる幻想ではなく、実在するデーモン、地上におけるキリストのわざを阻むことに熱中している、悪魔に仕えるものたちである」(ジェフリ・パートン・ラッセル『サタン』野村美紀子訳、教文館、1987, p. 64)。ただし、タティアノスは、これにたいし、デモンは墮天使であるとする (*Ibid.*, p. 67)。

- 19) *Journal des Faux-monnayeurs*, RRII, pp. 567-568.
- 20) *Ibid.*, p. 530.
- 21) (...) on ne le [= diable] sert jamais si bien qu'en l'ignorant. (*Ibid.*, p. 567)
- 22) *FM*, pp. 279-281.
- 23) *Feuillets*, II, pp. 1011-1014 を参照のこと。なお、ジイドはその悪魔観において、Jacques Raverat から多大な影響を受けた (*Ibid.*, p. 869)。
- 24) J'y [= dans le traité de l'insuffisance] aurais cherché, à travers toute la nature, le point limite, en deçà duquel rien n'est. (*FM*, p. 387)
- 25) Manque d'argent, manque de forces, manque d'esprit manque d'amour. Toujours du déficit; je resterai toujours en deçà. (*Ibid.*, p. 387)
- 26) Peut-être que vous croyez les hommes trop différents d'eux [= les animaux]. Il n'est pas de grande découverte en zootechnie qui n'ait eu son retentissement dans la connaissance de l'homme. (*Ibid.*, pp. 284-285)
- 27) Lois physiques enveloppantes. Wagon s'élançant dans la nuit; au matin il se couvre de rosée. (*Les Nourritures terrestres*, RRI, p. 377)
- 28) Le diable est donc la figure centrale qui règne dans l'ombre et guette tous les personnages des *Faux-monnayeurs*: Vincent, Passavant, La Pérouse, Édouard et Boris sont ouvertement concernés, mais bien sûr aussi Strouvillhou, Ghéridanisol ou Lilian

- Griffith. (Alain Goulet, *Lire les «Faux-Monnayeurs» de Gide*, Dunod, 1994, p. 109)
- 29) Il y aurait grand parti à tirer de l'histoire naturelle. Nécessité de faire intervenir dans le roman un naturaliste. (*En marge du «Journal des Faux-monnayeurs»*, RR11, p. 570)
- 30) (...) les sciences naturelles, à dire vrai, l'attiraient plus que la médecine; mais la nécessité de gagner sa vie... (*FM*, p. 200)
- 31) ヴァンサンが語る「ウリアランとステノアラン」のエピソードについては、*FM*, p. 286. なお筆者は、このエピソードは、ジイドが、Louis Joubin, *La Vie dans les Océans*, Ernest Flammarion, 1912, pp. 34-35 から拾ってきたものであることを確認した。
- 32) Maria Van Rysselberghe, *Les Cahiers de la Petite Dame*, t.1 (1918-1929), «Cahiers André Gide 4», Gallimard, 1973, p. 32.
- 33) Laissons-le[=Vincent] tandis que le diable amusé le regarde glisser sans bruit la petite clef dans la serrure... (*FM*, p. 213)
- 34) George Strauss, *La part du Diable dans l'œuvre d'André Gide*, «Archives André Gide» n° 5, Lettres Modernes Minard, 1985, p. 17.
- 35) 『贗金』の語り手は、時に全知であり、時に全知ではなくなる。「Auteur et Narrateur dans les Faux-Monnayeurs», Bulletin des Amis d'André Gide, n° 44, octobre 1979, pp. 33-44 で、Roy Prior は、語り手の自己矛盾を、気紛れを、その態度の無責任さを詳細に指摘している。
- 36) (...) cette réalité est sans doute créatrice, c'est-à-dire productrice d'effets où elle se dilate et se dépasse elle-même; ces effets n'étaient donc pas donnés en elle par avance, et par conséquent elle ne pouvait pas les prendre pour fins, encore qu'une fois produits ils comportent une interprétation rationnelle, comme celle de l'objet fabriqué qui a réalisé un modèle. (Henri Bergson, *L'Évolution créatrice*, Quadrige / PUF, 1941 (2009), p. 52)
- 37) ラプラスの魔と呼ばれるものは、以下のような恐るべき知性。「Une intelligence qui, pour un instant donné, connaîtrait toutes les forces dont la nature est animée, et la situation respective des êtres qui la composent, si d'ailleurs elle était assez vaste pour soumettre ces données à l'analyse, embrasserait dans la même formule les mouvements des plus grands corps de l'univers et ceux du plus léger atome; rien ne serait incertain pour elle, et l'avenir comme le passé serait présent à ses yeux」(Pierre-Simon Marquis de Laplace, *Essai philosophique sur les probabilités*, Cambridge University Press, 1825 (2009), p. 4)
- 38) たとえば、イーヴァル・エクランド『数学は最善世界の夢を見るか?』南條郁子

訳、みすず書房、2009, pp. 135-138 ; ダンカン・ワッツ『偶然の科学』青木創訳、ハヤカワ文庫、2014, p. 198.

- 39) 金子邦彦『生命とは何か——複雑系生命論序説』、東京大学出版会、2003, p. 27.
- 40) On voit à quel point le diable est au cœur de la subjectivité, et peut se manifester de façons diverses, contradictoires même. (Alain Goulet, *op.cit.*, p. 109) ; また、本論文の注 28) を参照のこと。
- 41) Car le diable, comme instance psychique, c'est à peu près ce que les psychanalystes (particulièrement Jacques Lacan) désignent comme *l'Autre*, c'est-à-dire l'inconscient («l'inconscient est le discours de l'Autre»), ce qui est de l'ordre du symbolique, et ce qui manifeste la coupure interne du sujet, le clivage du Moi. (*Ibid.*, p. 109)
- 42) Avez-vous remarqué que dans ce monde, Dieu se tait toujours? Il n'y a que le diable qui parle. [...] Vous vous souvenez du début de l'Évangile: "Au commencement était la Parole". J'ai souvent pensé que la Parole de Dieu, c'était la création tout entière. Mais le diable s'en est emparé. Son bruit couvre à présent la voix de Dieu. (*FM*, pp. 465-466)
- 43) ジイドの「レシ」の作中人物達は、例えばあの『田園交響楽』の牧師の場合のように、自分でも気づかない欲望によって突き動かされ、最後にその欲望に気づき、深い後悔に陥る。最初は気づかなかったという点でその欲望を、「無意識」とよんでもよいのだが、これは、物語が進行するにつれて明らかになってくる性格のもので、ジイド文学のテクニクの中核をなす。
- 44) Il suffit, bien souvent, de l'addition d'une quantité de petits faits très simples et très naturels chacun pris à part, pour obtenir un total monstrueux. (*FM*, p. 200)